学校だより No.７
令和2年9月8日(火)発行
須坂市立東中学校
文責：嶋田 和美（教頭）
http://www.azuma-school.ed.jp/

温故知新　小さな学校の大きな合唱　～9 月の校長講話から

東祭まであと３週間余り、コロナ禍の中、学校の新しい生活様式にともなう企画内容の見直し等を行いながら、着々と準備を進めています。

東祭の音楽会も１・２年のクラス合唱や PTA の合唱を、この状況下、十分な練習ができないために中止としました。

しかし、東中学校には、本校の強みとして、「いつでも気軽に歌うことができる合唱」があります。「校歌」です。勿論、本年度の東祭の音楽会でも「校歌」は歌うことになります。

９月２日（水）朝、校長講話が行われました。この「いつでも気軽に歌うことができる合唱」の背景、特に「無伴奏混声四部合唱」の誕生への思いについて知り、「校歌」の「無伴奏混声四部合唱」のさらなる高みを目指してほしい校長先生からのメッセージを生徒だけでなく、全教職員が受けとめる時間となりました。

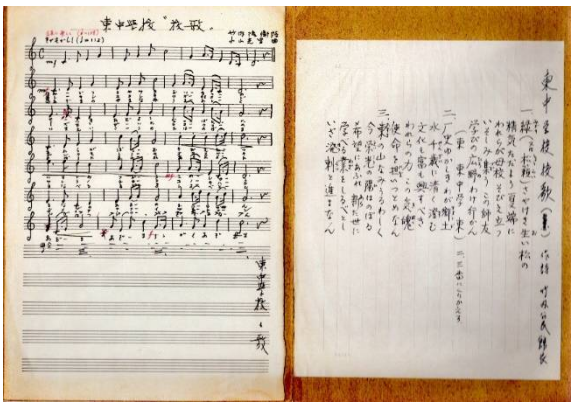
本校の歴史

東村の南部中学校と東部中学校が統合。昭和 33 年 5 月 1 日に開校式が行われ、東中学校の歴史がスタートしました。

令和 2 年度は、開校 63 年目となります。事務室の前には、周年毎の航空写真が掲示してあります。

航空写真から東中学校 63 年の校舎の歴史が分かります。

校歌制定



校歌の作詞は、竹内隆衛氏に依頼されました。

竹内隆衛氏は、須坂農業高等学校東分校の教諭をされ、昭和 30 年の村発足とともに公民館長も兼ねられ、公民館長を 34 年 3 月 31 日まで務められた。そして、昭和 36 年度、37 年度の東中学校のＰＴＡ会長として東中学校の充実のために努力された方でした。

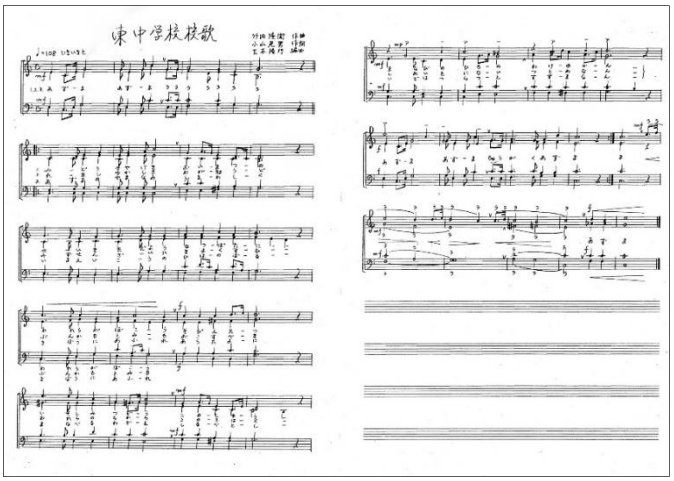
この校歌の詞は、昭和 33 年末に完成し、教育委員会など関係機関で協議した上、原作通り決定されました。

このようにして決定された東中学校校歌の作曲は、昭和 33 年末のうちに、東村出身の音楽家小山光男氏に依頼されました。

その小山光男氏から当時の小林厚校長宛に、「精魂を尽して作曲したい。」旨の回答が寄せられたそうです。

そして、この校歌が始めて発表されたのは、昭和 34 年 6 月 14 日、作詩者の竹内隆衛氏、作曲者の小山光男氏を迎えて、小中学校や村内関係者 800 人が集り、盛大に行われました。

現在の校歌の楽譜



右にあるのは、現在の校歌の楽譜です。開校当時に制定された校歌の楽譜と比較してみてください。違いが分かりますか。

現在の校歌の楽譜には、作詞・作曲の他に編曲が加わっています。また斉唱ではなく「無伴奏混声四部合唱」になっています。

つまり今皆さんが歌っている「東中学校校歌」は吉本隆行氏編曲の「無伴奏混声四部合唱」ということが分かります。

吉本隆行氏は信州大学の音楽の教授です。この「無伴奏混声四部合唱」の初演は平成 12 年 9 月 29 日に行われました。つまり誕生した日、誕生日が平成 12 年 9 月ということになります。

そうすると今年は何歳になるでしょうか。令和元年は、平成 31 年です。今年、令和 2 年は、平成だと平成 32 年なので、「無伴奏混声四部合唱」が誕生して 20 年、つまり 20 歳「成人式」ということになります。

創立 60 周年記念音楽会～対談より

平成 29 年 9 月 創立 60 周年記念音楽会で、当時の学芸委員長・教頭先生・編曲者の吉本隆行先生の対談が行われました。その動画を見てみましょう。

学芸：田中美里さん 小林：当時の教頭先生 小林雅彦先生（現須坂市教育長） 吉本：編曲者の吉本隆行先生

司会 「それでは、先輩にインタビューしてみたいと思います。まずは先輩、お名前をお願いします。」
学芸 「皆さん、こんにちは。東中の卒業生の田中美里と申します。」
司会 「田中先輩、先輩が中学生だった頃の様子をお聞かせください。」
学芸 「もう 20 年近く前なので、さかのぼって思い出しますと、まだ私が入学したときはこの体育館はなく、古い体育館で、校舎はできたばかりでした。なので、学校に入ると木の匂いがして、校舎も新しい感じがして、気持ちよく勉強できたことは覚えています。」

司会 「それでは、校歌についてお聞きしたいのですが、先輩たちはどんな思いで東中の校歌を作ったのですか、どうして混声四部合唱にしようとしたのですか。」
学芸 「私が入学したときは、一つのメロディを歌っていたのですが、思い出しますのは、３年生の時に修学旅行に京都に行ったんですけど、その時に、南禅寺というお寺で、みんなで合唱をしまして、その時に私は学芸委員長だったので指揮をしたんですけど、その時は『大地讃頌』を四部合唱で歌ったんです。なので、校歌もそのような形で合唱曲として歌えたらいいなと、四部合唱で歌えたらいいなという思いがありまして、先生方に相談したんですが、その際に、私たちに熱心に指導してアドバイスしてくれた先生がいたんですが。」
司会 「それはどなたでしょう？」
学芸 「皆さんもよく知っている方だと思います。」

司会 「それでは小林先生にインタビューしてみたいと思います。」
小林 「私は平成 12 年から３年間、ここで教頭をさせていただきました。その最初の時に、田中さんに出会いました。」
司会 「その頃の東中学校の様子や田中先輩たち生徒の様子が知りたいので、お話ください。」
小林 「最初に東中に来た時に、まずこの体育館はありませんでした、古い体育館でした。でも向こうの校舎は新しくて、この校舎の向こう側にアルプスがきれいに見えますよね、それを眺めるために、校舎の西側なんですよね、向こう側にわざわざベランダを造ってあると、そういう自然とか、皆さんの雰囲気を大事してくれる学校だと感じました。三心自立も、自分たちで何かをつくっていくんだ、生徒がつくっていくんだという気持ちがとても強い学校だなと思ったことが、第一印象でした。」

司会 「小林先生、田中先輩、いよいよ本題なのですが、混声四部合唱は、どんな様子の中で誕生していったのでしょうか。お二人でお話しいただきたいのですが。」

小林 「何校か校歌を合唱にして、というところに立ち会ってきたんだけど、他の学校と東中の校歌を勉強しようとしたとき、決定的に違うことが一つだけあるんですよ。それは何かというと、ここに田中さんが座っているということです。つまり、私は音楽をやっていたので、校歌を編曲してみんなで合唱しようという発想、私から出すのが普通だったんだけど、この学校に来たら、生徒が合唱にしたいんだ、先生、助けて、と言われことです。これが、この学校の校歌の混声四部合唱誕生の一番の根っこにある部分だと私は思いました。」

小林 「それで、私は逆に田中さんに聞きたいんだけど、合唱にしたいと思った、あなたが生徒として思った理由、さっきの修学旅行の話もそうなんだけど、何かあったら話してください。」
学芸 「そうですね、思い当たることといえば、私自身が、歌が好きだったということがあると思うんですけど、私は部活で合唱部の部長をやっていまして、先生方が合唱に対して熱心に指導してくださったということが一つあると思います。あとやっぱり、練習すると、中庭で合唱することが多くて、そうすると、今日みたいな天気のいい日ですと、すごく緑が見える中で、きれいな空気を吸いながら合唱することが、すごく気持ちよかったのです。例えば、ピアノのない場所でも、四部合唱とかメロディが重なり合って聴きごたえがあるものを歌いたいなという気持ちがあったのかなと思います。」
小林 「なるほど、それで、田中さんから相談を受けたのが私だったんですが、ただ、そのために、すぐ動こうかって言ったら、そうじゃない、生徒総会で、生徒集会だったっけ？」
学芸 「はい、生徒集会です。」
小林 「生徒集会で全校の皆さんにそれを問いかけて、よしやろうってなったら先生お願いします、っていうんですよ。そうですか、なるほどと思いました。ねえ、頼ってないんですよ。で、田中さんは生徒集会で動きました。具体的にどんな風に動いたんだっけ？」
学芸 「記憶をたどりますと、私は学芸委員長だったので、生徒会長とか本部の役員に相談しまして、みんな賛成してくれたことが一番大きかったと思います。」

小林 「それで、校歌を合唱にしたいという生徒の皆さんからの気持ちをうけました。東中の、今もそうかもしれないけど、中庭は、合唱するのによく響く場所です。さっき田中さんも言いましたが、ピアノを使わなくても、外でも音一つパーンととれば、すぐにハモることができる歌があったら素敵だな、そんなことが校歌でできたら、世界に一つしかないこの学校の校歌ですので、なにかこういろいろなところで歌える、修学旅行でだって歌える、そういうことでいよいよ校歌編曲のスタートを切ったということでしょうかね。」
司会 「でその校歌の編曲はどの方にお願いしたのですか。」

小林 「それをお願いした方は、当時、信州大学の教授をなさっていた吉本隆行先生にお願いをいたしました。

小林 「実は吉本先生は、私の恩師でありまして、大学時代に音楽を教えていただきました。そして、吉本先生にお願いしにいくんだけど、その時に田中さんも行く？と聞いたら、はい、行きますって言って、私と田中さんの二人で、信州大学の吉本研究室にお願いに行ったんでしたね。」
学芸 「はい、当時中学生でしたから、大学の先生のところに行くのは緊張したのと、先生の車に乗せていただいて、キャンパスに伺ったんですけど、研究

室に伺ったら、とてもお優しそうな先生がいらっしゃいまして、この先生にお願いしたら間違いなくいい曲になるとその時に思いました。」

吉本「お二人で見えたのを、今思い出しました。東中の校歌は、各パートに主旋律をあげるということで、そのようなことを心がけ、つくるということにしました。」

吉本「まず、ソプラノをどうするかということですね、一番目立ちますから、そこを上手につくらないといけない、そのことが一番苦心したところです。」

小林「先生からいただいた楽譜を見て、とてもすてきだなと思いました。一番は『あずま』というのが、頭にくるし、最後にもくる。『あずま』という響きは、とても明るい響きがするんです。ですので、「あずま」という響きが最初と最後にくる。ものすごく明るい響きをした、いい曲だなと思って、その楽譜を見ましたが、生徒だった田中さんは、出来上がった楽譜を見て、どんな風に思いましたか？」

学芸「春にお願いに上がって、9 月の東祭のときにみんなで歌わせてもらったんですけど、その時は身震いがするような、私が指揮をしたと思うんですけど、すごく一体となった感じがありました。歌っていてすごく気持ちがいいなという感じでした。」

小林「段々段々いろいろなことが思い出されるのですが、私はその時に思いました。吉本先生につくっていただいて、完成したときに、古い体育館だったんだけど、とてもよく響きました。ここに、『三心自立』という文字が書いてありますけど、これは本当に、生徒の皆さんが求めて、求めて、求め続けていったら、相手が歩いてきてくれた、相手がこっちに歩いてきた。」

小林「やりたいといったら、信念を持ってやったら、壁に当たっても、ぶち破る、って言ったらいけないけれども、そういうことをしていくと、私の場合、田中さんの場合は、吉本先生が目の前に来てくださいました。そして、どうだい、これ、と私たちが欲しいと思ったものが目の前に現れたのです。嬉しかったよね。」

学芸「はい、すごくうれしかったです。」

小林「合唱は人数の多さではなくて、やっぱり、ハモるとか、音を聴き合ってつくるとか、そういうことが大事なので。」

小林「どうかこれからもこの校歌を大事にしていただきたいなと思いました。」

吉本「これからも、素晴らしいハーモニーを聴かせていただきたいと願っています。」

当時の先生方の姿～別紙資料より

当時の教頭先生、小林雅彦先生の「上高井教育会報」への寄稿がありますので読んでおいてください。

本校の宝㊳「校歌の大合唱」東中学校　　小林　雅彦

東中学校本校では入学式から卒業式まで、一年中の諸行事に全校でアカペラ混声四部合唱に編曲された校歌を大合唱し、その場の雰囲気を盛り上げている。響きの美しさと力強さとを兼ね備えた校歌を生徒と職員が一体となって力の限り歌い上げる時、体育館は珠玉の時間に包まれる。まさに本校の宝物のひとつである。

平成 12 年 5 月の生徒総会でのことである。ある三年生が「今年は、今よりもっと校歌や生徒会歌を全校みんなでしっかり歌えるようにしようではないか」という発言をした。それを受けた学芸委員会では、教室や校外でも気軽に声を合わせられるように、アカペラの校歌に編曲できないかと音楽科に相談した。

そこで音楽科では、学芸委員にいろいろな学校の合唱になっている校歌を聴かせ、編曲のイメージを持たせた。そして生徒のねがいを実現させるべく、学芸委員長とともに信大教育学部の吉本隆行先生を訪ね、編曲を依頼した。その席で学芸委員長は、本校は男子も大きな声を出すので、男子パートにも旋律がほしい、音楽会や親善音楽会でも曲として歌えるように、声だけの前奏や後奏もつけてほしい等のお願いをした。吉本先生は、委員長の要望を快く引き受けてくださった。

待つこと二ヶ月。要望が見事に取り入れられて編曲された校歌が出来上がってきた。まず、全校生徒の前で職員 8 名による初演会が行われた。そして、練習開始！九月の東祭では全校によるはじめての編曲校歌が体育館に響いた。

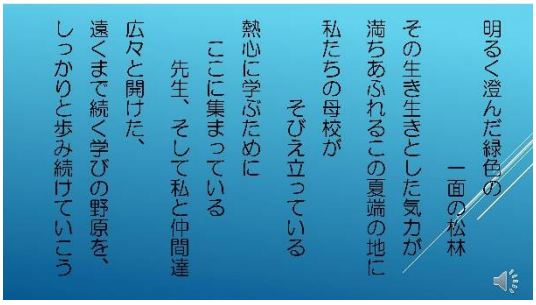
しかし、この時点で校歌合唱はまだ本校の宝とはいえなかった。はじめ、生徒は自分のパートに自信がなく、始業式や終業式で歌うごとに出来不出来の差が大きかったため、斉唱の方がいいという意見も聞こえてきた。そんな時でも、多くの職員が自分のパートの音を必死で覚え、生徒の横に立っていつも精一杯の声で歌っていた。そのような職員の声や姿に励まされ、全校の校歌合唱は次第にその質を高めていき、事前に練習しなくてもその場で響き合う合唱ができるようになった。

本年度、本校は新体育館を建設していただくことになり、6 月 27 日に体育館とのお別れ式が行われた。その最後に歌った校歌のハーモニーは思い出多い体育館の天井や床や壁にしっかりと刻み込まれたに違いない。

なお、2 月に完成予定の新体育館の入口には平成 12 年度卒業生が卒業記念に贈ってくれた校歌の大きな楽譜が掲げられることになっている。

平成 14 年 7 月 22 日　上高井教育会報　第 194 号

校歌の歌詞に込められている思いを考えよう～創立当時、東中に寄せられた思いから



東中学校校歌

1　緑さやけき生い松の
精気ただよう夏端に
われらが母校そびえたつ
いそしみ集うこの師友
学びの広野わけゆかん
東　東　中学東

平成 29 年 9 月創立 60 周年記念音楽会で歌われた「校歌（無伴奏混声四部合唱）」を聴きながら、改めて、校歌の歌詞に込められた創立当時、東中に寄せられた思いを考えてみましょう。スクリーンを見ながら、聴いてください。（「校歌（無伴奏混声四部合唱）」の音声ともに）

（四阿山・根子岳・破風高原など）東の地の見事な山々は、
気高く美しい
その山並みから朝日が昇るように、日頃の学びの成果が自分の力となって役立つだろう
あふれる希望を抱き、新たな世界・社会に向かって
東中学校で身につけてきた「学びに打ち込む姿勢」を、自分が進む道案内として、
さあ、生き生きと、そして元気よく、力強く進んでいこう

2　歴史ゆかしきわが郷土
水千歳に清く澄む
文化も富も興すべき
われらの力この気魂
使命を担いつとめなん
東　東　中学東

心ひかれる古い歴史を持つ
私たちの郷土（東の地）
山々に降り注いだ雨水は、永い年月を経て清く澄んだ豊かな水となって流れている
太古の昔から人々が生きてきたこの地で、私たちも文化や経済を発展させるために、
私たちの無限の力と、力強く立ち向かうこの精神力で、
次代を担っていくという使命感を持って、中学生としての学びに専念しよう

3　東の山なみうるわしく
今栄光の陽はのぼる
希望にあふれ新たな世に
学べる業をしるべとし
いざ溌剌と進まなん
東　東　中学東

スクリーンに書かれた創立当時の東中校歌への思いに集中しています。

小さな学校の大きな合唱　とは？

熱心に学ぶためにここに集まっている先生方、そして私と仲間達、このメンバーで歌えるのは今年限りです。

・創立当時の人々の思い
・生徒の願いからつくられた無伴奏混声四部合唱
・二十歳を迎える校歌四部合唱に寄せるこのメンバーの思い

を大切に、演奏者と聴衆とが、音でつながり、豊かな一体感を感じることのできる合唱
東祭の音楽会、校歌の成人を祝し、様々な思いを込め、今年限りの合唱を響かせましょう。

小さな学校の大きな合唱　とは？
◇歌詞に込められた思い　◇その歌が創られた背景
◇確かな音程　◇確かな発声（腹筋、姿勢、のどを開く）
◇頭声発声（音を共鳴させて響かせる）
◇母音、子音の発音（息のスピードを合わせる　音色を合わせる）
◇他のパートを聴きながら
◇ブレスのタイミングをそろえる
◇強弱　f（フォルテ）
×強く、大きな声で歌う　○大きな（広い）気持ちで歌う

生徒の感想　生活ノート「三心自立」より

今日は校長講話がありました。題名は校歌についてでした。私の母も東中出身なのですが、その時はアカペラではなかったそうで、平成に入ってアカペラになったことを知り、ビックリしました。アカペラだと、いつ、どこにいても歌うことができて、思いが込められていると思いました。（１年）

校長講話がありました。今日は、校歌が四部のアカペラになるまで、どんなことがあったのかなど、東中の歴史が分かりました。４つのパートがハモるととてもきれいで、いい曲だなと思います。これからは曲作りに携わっていただいた方、歌い継いできてくれた先輩方に感謝して歌いたいです。（１年）

僕たちが入学した日、東中の校歌を聴いて鳥肌がたったのを思い出しました。たくさん練習して歌えるようになった校歌の裏にはこんな歴史があったのだと思いました。３年生が卒業してしまったら、僕らが２年、１年を引っ張っていかなければならないので今からでもしっかり練習をして、東中学校の宝を守っていきたいと思います。（２年）

今日、校長講話で東中の校歌がなぜ「アカペラの四部合唱なのか」を知りました。私はてっきり東中の校歌は、四部合唱で、アカペラで歌うものだと思っていましたが、それには「気軽に校歌を歌えるように」「響きや力強さがより伝えられるように」という思いが込められていたのです。また、校歌は難しい言葉（自分たちのなじみのない歌詞）で歌っていても、何を歌い表しているのか分かっていませんでした。20 歳を迎える東中の校歌が「小さな学校の大きな合唱」の始まりなら、私たちはそれに込められている歌詞の意味、アカペラ四部の意味と、後輩たちに姿で見せていかなくちゃなと思いました。（３年）

コロナ禍の中、今年度の東祭は、数々の制限があります。音楽会の合唱も練習を含めその一つです。制限があるからこそ、一番身近で、大切な合唱曲「東中校歌」に目を向けて、じっくり考えながら練習できるチャンスだと今回の校長講話を通して感じました。東祭音楽会での「東中学校校歌」が何よりも楽しみになりました。